

# 異文化コミュニケーション能力の育成

—日本語教育を中心に—

The Cultivation of Cross-cultural Communicative Ability

—Japanese-education-oriented—

徐 璐

XU Lu

西北大学外国语学院

*The School of Foreign Languages, North-west University*

**Abstract:** The increasing frequency of cross-cultural communication nowadays poses new requirement to foreign language teaching, the ultimate aim of which now becomes the cultivation of cross-cultural communicative ability. Language learners should improve their communicative ability from the perspectives of cognition, affection and behavior by learning the target languages and the corresponding cultures and purposefully practicing their communicative ability. Based on their cultural knowledge, they should be aware of the cultural similarity and difference and hold open, unbiased attitude towards other cultures. They could appropriately adjust their verbal and non-verbal languages in accordance with the communicative partners and settings.

**Key Words:** cross-cultural communicative ability; cognition; empathy; behavior; Japanese education

**要旨:** 文化背景の異なる人々とのコミュニケーションがますます頻繁に行われるようになってくる 21 世紀には、学習者の異文化コミュニケーション能力を育てること、すなわち、目的言語、目的文化知識の学習およびコミュニケーション能力の訓練によって、コミュニケーション能力を高めることが最終的な目的となっている。さらに一般文化の学習を通して、異なる文化と文化を比較し、ステレオタイプを取り除き、異文化に対して、包容的かつ開放的な態度で感情移入をし、相手、状況、会話スタイルによって、臨機応変に適切に自分の言語と非言語行動を調整し、学習者の認知、情緒、行動面における異文化コミュニケーション能力を育てることが必要になってくる。

**キーワード:** 異文化コミュニケーション能力 認知 情緒 行動 日本語教育

国際化の時代を迎えるに伴って、外国語教育もただ言葉を教えるだけではなく、より広い意味での国際的な相互理解、問題解決を目的とする異文化コミュニケーション能力の育成を目指すことが必要になってくる。中国での日本語教育も、事柄を伝える語彙、文型、文法中心の日本語教育から、日本文化の教育を少しずつ授業に織り込み、中日文化の異同に気付かせ、コミュニケーションを成立させるために、日本人の思考方式、行動様式、価値観をしっかりと理解し、適切な行動をして目的を成し遂げるための日本語教育への転換が必要になる。さらにそのうえに一般文化の学習を通して、異なる文化を比較し、ステレオタイプを取り除き、異文化に対して、包容的かつ開放的な態度で感情移入をし、相手、場面、状況、内容などによって、臨機応変に適切に自分の言語と非言語行動を調整し、学習者の認知、情緒、行動面における異文化コミュニケーション能力を育てることが必要になってくる。

## はじめに

1960年代、アメリカの文化人類学者ホール (Edward T. Hall) の傑作『沈黙の言葉』(The Silent Language) (1959) が出版され、異文化コミュニケーション学の誕生を示した。それ以来、アメリカをはじめ異文化コミュニケーション研究が盛んに行われるようになってきた。異文化コミュニケーション学は学際的な性質を持ち、コミュニケーション、言語、文化、社会、教育、心理などの要素を統一し、異なる文化の相互作用を理解するのに新しい扉を開き、外国語教育もその研究方法と研究成果から大いに啓発された。90年代になって研究がますます深まり、それに伴って、中国の研究者にも大いに注目され、特に外国語教育界にも大きな関心を持たせるようになった。

近年、中国の研究者、例えば、鄧炎昌、劉潤清 (1989)、胡文仲、高一虹 (1997)、賈玉新 (1997)、顧嘉祖 (2000) などが著書を出版して学説を立て、言語と文化、文化とコミュニケーション、文化差異と外国語教育、非言語コミュニケーションと文化、文化ステレオタイプ、異文化コミュニケーション能力など、異文化コミュニケーションに関する理論を紹介し、研究を続けてきた。

本論はそれらの研究を踏まえて、異文化コミュニケーション能力はどんな内容を含めているかを外国語教育の立場からはっきりさせ、日本語教育の現場では異文化コミュニケーション能力のもつ人材を育てるにはどうすればいいかについて検討してみようと思う。

## 一 異文化コミュニケーション能力

異文化コミュニケーション能力とは何かということに対しては、研究者の間でさまざまな意見があり、Hammer (1989)、Ruben (1989)、Gudykunst (1994)、Byram (1997)、Bennett &

Allen (1999) の論述が影響力を持っているが、まだ定説と見られるものはない。しかし、いずれも次の二つの要素が欠かせない。すなわち、(1) 異文化の人々と相互作用をして、自分の目的を達成するコミュニケーションの効果性。(2) 異文化のさまざまな状況の中で、適切でふさわしい行動がとれること、いわゆる行動の適切性である(石井敏他編、2003: 17-21)。多数の研究者たちは長期にわたって分析した異文化コミュニケーション能力をまとめると、次の三つの構成要素、つまり、情緒、認知、行動が挙げられる。情緒面においては、次のいくつかの面が大切だと思われる。

1. 民族中心主義と先入観の存在を意識し、偏見や否定的なステレオタイプを取り除く。ステレオタイプはある集団やその集団に属する人に対して、固定的な枠組みを当てはめた認知、知覚のことを指し、その集団・そこに属する人がとるであろう行動を、集団の属性で予測することだという(西田ひろ子編、2000: 108-114)。ステレオタイプ、偏見、差別は密接にかかわりあっている。つまり、三者は、否定的なステレオタイプが偏見につながり、偏見が差別を生み、差別が否定的なステレオタイプをますます強化する、という切れることのないつながりで結ばれている。だから、個人や社会が、自分たちの持つ否定的なステレオタイプや偏見に「気づく」ことが大切だと考えられている。それを意識してコントロールすることにより、それらから解放されることができるのである。ステレオタイプが著しくなると、自民族中心主義に陥ってしまう。自民族中心主義は他のすべての集団の環境、コミュニケーションを自分たちの文化の価値に基づいて判断しようとすることである。自民族中心主義は異文化理解を妨げるものであるから、自分を知り、他人を知ろうとする意識的な努力が異文化コミュニケーションに不可欠なのである。

2. 異文化に対して好奇心を持ち、楽しみ、開放的かつ寛容的に感情移入をする。感情移入とは相手方の視点から、物事を理解することである。相手文化を深く理解さえすれば、異なった価値観や思考、行動様式を持つ人の立場から物事を見ることができるようになる。また、自分自身のことばかり考え、他人への関心をおろそかにしたり、ある集団、階級、人間についての知識が足りなかったり、優越的な態度をとったりするのは感情移入を妨げることになる。

3. 文化相対主義思想と異文化意識を持つ。円滑な異文化コミュニケーションをするには、文化相対主義に基づく異文化意識を育てることが大切である。個人や社会は異文化に対し、自国文化を基準にして、諸文化の優劣を判断しようとするのであり、偏見やステレオタイプという否定的な先入観を持ちやすい。実は、いかなる文化もそれに相応しいものの考え方や価値観がある。故に、異文化に対して、自国文化の視点から、安易に優劣を評価する自文化中心主義を乗り越え、全ての文化に優劣が無く、平等に尊ばれ、相手側の価値観やその文化、社会のありのままの姿をよりよく理解しようとする文化相対主義の態度を取るべきである。

以上、異文化コミュニケーション能力の構成要素の情緒面について述べたが、次に知識面について述べていきたい。知識面においては、次のいくつかの面が欠けてはいけないと考える。

1. 自他文化の知識を蓄え、それについて分析し、文化の相違を理解する。コミュニケーションと文化は、密接な関係にある。コミュニケーションの仕方は文化から学んでいる。また一方では、コミュニケーションの仕方そのものが、文化自体を形作り、定義付け、そして存続させている（成毛信男、1998）。価値観は文化の重要な構成要素である。国語辞典（大辞泉）によると、価値観とは物事を評価する際に基準とする、何にどのような価値を認めるかという文化の相違は、価値観の相違を意味し、行動様式の相違を生むことになるわけである。考え方や感じ方、行動の仕方に大きな影響を与えている価値観についての理解を深めることは、誤解や摩擦を減少させ、より円滑なコミュニケーションを図るために不可欠である。

2. コンテキストの知識を学び、コンテキストがコミュニケーションに影響を及ぼすことを意識する。コンテキストはコミュニケーションの仕方、さらにそれを取り巻く諸々の状況、例えば、物理的状況、言語、共通の知識、体験、価値観、ロジックなどをさしている。コミュニケーションの専門家であるワードナー（R. Wardhaugh）のコンテキストの大切さに関する論述によると、ほとんどの発話は、それがおこるコンテキストに関しての知識なくして、その意味、あるいはその意図していることを正確に理解することは不可能だという。コンテキストをわかりやすく説明するのに、アメリカの文化人類学者であるエドワード・T. ホールが唱えた「ハイコンテキストとローコンテキスト」という識別法がある。ハイコンテキスト文化とはコンテキストの共有性が高い文化のことで、一々言葉にして伝えなくても、お互いに相手の意図を察しあうことで、なんとなく通じてしまう環境のことである。例えば、日本はハイコンテキストに属する。一方、欧米などのローコンテキストではコミュニケーションのスタイルと考え方が一変して、コンテキストに依存するのではなく、あくまで言語によりコミュニケーションを図ろうとする。ほとんどの発話は、それがおこるコンテキストに関しての知識なくして、その意味、あるいはその意図していることを正確に理解することは不可能である。

3. 言語、非言語操作能力を高める。前者は体系化された発音、文法、語彙の規則に従って言語を使う能力を指す。この能力については、単に規則上正しいというだけでなく、言語構造をコミュニケーション機能と関連付け、言語表現を相互活動の伝達手段として、場面、対象、状況に応じて、適切な言語行動が要求される。また、コミュニケーションは非言語から切り離されては成り立たないものである。人とコミュニケーションをする場合に、非言語コミュニケーションによるメッセージの伝達量は65-70%にも及ぶといわれる。非言語コミュニケーションも文化によって異なるので、それに関する知識が欠けると、非言語コミュニケーションが引き起こすコミュニケーションギャップが避けられない。

4. 文化学、社会学、心理学などに関する知識を蓄え、文化および文化学の本質を理解し、異文化コミュニケーションの普遍性を身につける。

以上、異文化で情緒面と知識面に関する能力をまとめたが、いくら頭の中で物事を理解していても、実際に目的にかなった適切な行動を出さなければ何にもならない。だから、行動面においては、次の能力が不可欠であろう。

1. 対人関係樹立の能力。異文化を持つ人との関係を築き、それを維持、発展させる。
2. 相互作用能力。自分の思っていることや相手と違う意見を明確に表現し、また相手を支持し、対等感を与えるコミュニケーション能力。
3. 不明確なコミュニケーション環境においても、カルチャーショックや異文化コミュニケーションが引き起こす緊張感や不安を即時に調節する。
4. 文化の相違を理解し、それを異なる価値、意味系統と関連付ける。相手の立場に立って物事を理解し、問題を解決する。
5. 異なる文化の人々のコミュニケーションの仕方によって、適切に自分の言語行動を調節する。
6. 異なる文化現象を観察比較し、自国文化や自分の異文化コミュニケーションの行為を常に考え直す。

異文化コミュニケーション能力の態度、認知、行動面における項目をまとめたが、外国語教育の現場では、その3方向から総合的に、立体的に行うのが理想的で、重要である。一般にはこのバランスが取れていないのが現状である。知識偏重の教育が主流であり、実践面への取り組みは明らかに遅れている。もちろん、文化そのものの内容、例えば自・他の文化の生活や習慣、思考や行動の様式、価値観、さらには異文化に対する先入観や固定概念の客観的理解や認識といったものは、コミュニケーションにおいて、誤解や摩擦を避けるためには欠かせない前提要素である。しかし、それだけでは十分ではあるまい。それに加えて、実地に即した振舞い方を教える実践的な教育も不可欠だ。具体的には、次のような方法が考えられる。

## 異文化コミュニケーション能力育成方法の検討

### (一) 視覚資料をうまく利用すること

映像作品は、日本人の日常生活をよく反映しているので、それをうまく利用できれば、日本語教育に大きく役立つ。学習者はより多くの場面に接し、観察し、発見し、その個々の現実場面を見ることによって、伝達される内容や伝達のあり方の背後にある価値観、行動様式、思考方式、適切な言語行動と非言語行動の選択、人間関係の構築などに関する日本文化を学習することになる。その場における顕在的な行動の観察、および、それらの背

後にある意識の発見を経験することがもっとも有効である。

## (二) 事例紹介、事例分析、社会的文脈(コンテキスト)を伴う場面をディスカッションすること

日ごろから身の回りや、新聞、雑誌、本などに掲載された現実には起きている異文化間問題の事例を集め、それについて紹介することで、あまり異文化間コミュニケーションの経験のない人の興味を喚起し、不自然、不思議、不可解な物事に気づかせ、それが文化の相違によることを理解させ、文化の相違は相対的なものであって優劣はないという意識を持たせる。それから、事例について、現れた人物の文化背景の特徴や、何が誤解や異文化摩擦の原因となったのかなどについて分析し、ディスカッションする。討議の過程を通して、問題発見や、分析の能力が開発され、ものの見方や考え方をさらに深めることができる。そうすれば、実際にコミュニケーションをする場合に相手、場面、状況、内容などに応じて適切な言語、非言語行動をするのにプラスになるであろう。例えば、次の事例がある。中国人の留学生が日本人の先生にお金を借りる場合の例で、一生懸命丁寧な話し方をしますが、先生はお金を貸してあげようとする気持ちがわいてこない。それはなぜであろうかを学生に分析させ、ディスカッションしてもらおう。

例1 学生：「先生いらっしゃいますか。」

先生：「はい、どうぞ。」

学生：「先生、実は奨学金が急に遅れましたので三万円お貸しいただけませんか……、ませんか」 (水谷 修, 2004)

中国人の日本語学習者はお金を貸してもらえないのは不思議だと思う。話し方も丁寧だし、文法も間違いなく、きちんとしている。なぜコミュニケーションギャップが生じたのであろうか。学習者に分析させると、次のいくつかの原因が挙げられた。①日本人個人の間にはお金の貸し借りの習慣がない。②学生がいつお金を返すかについてはっきり言わなかった。③三万円は先生にとって負担である。④学生は先生とあまり親しくない。⑤人に頼む場合に「あのう～」を使って、相手に頼みごとがあるのだと伝えたほうが良いなどといった意見が出された。討論した結果、①と⑤を選択する人が多い。⑤は普通中国人学習者に意識されない、よく起こる問題のひとつである。日本語の話し言葉の特徴は、言葉自体によって人間関係や相手へ気配りを示すことである。頼み事をする場合には、「あのう～」ではじめ、予め相手に頼みごとがあるのだと伝える。つまり、先ほどの例を次のようにすると、相手との社会的距離や、相手の立場を配慮した表現となり、押し付けがましく失礼な物言いであるというイメージは避けられる。

学生：「あのうー、大変申し訳ありませんが、実は奨学金が急に遅れましたので、三万円ほど(ぐらい) お貸しいただけませんか」

最初の一言、「あのうー」と言って相手に頼みごとがあると伝え、聞き手に頼まれる事柄の重さを察知してもらい、心構えができるように待つという配慮の気持ちを表すのが必要である。要するに相手に近づくための言葉、相手との合意を形成するための言葉が必要なわけである。それから、相手に迷惑をかけることに対して陳謝し、状況の説明などを経ることが多いが、中国人の学習者はそこを省略して、いきなり用件に入ってしまうという中国語の表現習慣をそのまま日本語に移し、相手は心の用意ができず、唐突で、失礼だと感じてしまう可能性がある。また、依頼することは相手に負担をかける行為であるから、負担をかけることを軽減する表現を選ばなければならない。例えば、「ほど」「ぐらい」を使って、金額をはっきり限定せず、相手の都合によってはそれより少なくとも（もちろん多くても）かまわないから、できるだけ依頼の内容を相手の都合に合わせてようとする態度を示し、判断の余地を相手に与えるという配慮の気持ちを表したほうがよかろう。この点からも両国の言語行動の違い、両国文化の違いが見られる。

また、次の例もある。

例2：中国人の留学生Bが日本人Aの家を訪問して

A：あら、もう五時。

B：まあ、もうそんな時間になってたのね。そろそろ失礼しなければ…。ご主人もお帰りになる時間でしょう。

A：ええ、でもまだよろしいんですよ。ゆっくりしていただくだけでも…。

B：そうですか。じゃあ、お言葉に甘えてもうしばらく…。(田中共子, 1996)

この例は中国人の学生にしてみれば、本当に居残ってほしかったどうか判断しにくい。もし帰ってほしいなら、もっとはっきり言えばよいのである。例えば、「あら、もう五時、そろそろ夕食の準備をしなくちゃ、よかったら一緒に晩御飯でもしようか。」と言って相手に選択してもらおう。「ゆっくりしていただくだけでも」と言うのは偽りである。Bの判断は日本人が話すときには本音と建前を使い分けていることを知識として知っておかなかったために起きた誤解であろう。「本音」とはその人が感じた事をストレートに表現することであり、「建前」とは周りを慮って修飾した虚偽の表現をすることである。日本人はコミュニケーションをする場合に自分の本心の気持ちを言葉にせず、つまり本音を隠して、建前の言葉で本音を分かってもらおうようにするのである。いわゆる、「察し」の文化で、言わないことに価値を置く文化であり、「ハイコンテキスト」文化の典型的な代表である。日本人はいちいち言葉に出してコミュニケーションするのではなく、示している婉曲な諾否の反応を察してお互いに傷つけあわないような手段を取ることを望む。そういうところを理解しなければ、互いに意志の疎通ができなくなる。

### (三) 疑似体験と役割練習 (ロールプレイ)

役割演技のことで、特定の目的にあわせて設定された役割を演じることである。この方法を用いるときには、学習者は、教室外で起こりうる場面に自分が置かれているところを想像したり、このような場面において、特定の役割を担ったり、役割に応じてそのような場面が実際に存在しているかのように行動したりするよう要求される。この練習を通して、学習者は表現練習よりはむしろはっきりと意味の伝達に重きを置き、相互活動での役割が認識できるようになる。学習者は自分自身で所定の役割を演じることにより、納得の度合いが高くなる。もちろん、いきなり、ロールプレイをさせるのも無理なところがあるかもしれないが、いくつかの段階に分けて進めていくと学習者の創造性の幅が増していく。最初は、学習者に教科書や、聴覚教材、視覚教材より暗記したものについて会話の実行をさせる。それから、文脈が与えられた練習、表現内容を設定する条件会話の練習、創造的な役割演技の練習などの一連の練習を通して、学習者のコミュニケーション能力を向上させる。

プレイ終了後、観察者は役担当者に対するコメントを発表し、次に役担当者から役にたいする感想を述べさせ、最後に、自分のロール・プレイングにたいする感想、反省、釈明などを述べてもらう。これによって、学習者本人がどう受け止め、成果をどのように生かそうとしているのかがはっきりするので、効果的ではないかと考える。

### 終わりに

このように、情緒、認知、行動面における異文化コミュニケーション能力を目指す日本語教育の必要性はますます重要視されるようになったが、教師自身にはその訓練や方法論も不十分であるのが現状である。また、教師には過重な負担感があり、語彙や文法などを正確に伝えやすく、異文化コミュニケーション能力を育成するのは一日二日のことのできるわけではなく、時間と精力がかかることで、本職以外の領域に位置づけられる傾向がある。それこそ弊害が大きく、等閑視してはいけぬ。教師は常に語彙や文法を中心に教えることから、発想を転換する必要がある。異文化コミュニケーション能力を育成するための教育方法論の研究や教材の開発にもっと力を入れ、技巧を高め、より多くの実践的なアプローチが期待されている。

(この論文の日本語表現は加納寛先生のチェックを経たものであり、感謝の意を申し上げます。)

### 参考文献

- [1] Hall, E.T, 1959 The Silent Language. Garden City, NY: Doubleday and Language



- [2] Fantini, A. E. 1994 Developing intercultural communicative competence. TESOL-Spain Quarterly Newsletter. p7-13
- [3] 贾玉新, 跨文化交际学 上海外语教育出版社, 1997。
- [4] 高一虹《跨文化交际能力的培养：“跨越”与“超越”》《外语与外语教学》2002年第10期
- [5] 张红玲, 跨文化外语教学, 上海外语教育出版社, 2007
- [6] 陈岩, 《谈中日跨文化交流中本国文化和母语的干扰》, 《日语学习与研究》2004年第4期。
- [7] 王秀文《跨文化交际与日语教学》在《日语学习与研究》2005年第3期
- [8] 土居健郎『甘えの構造』, 弘文堂, 1971. 2
- [9] 中根千枝『タテ社会の人間関係』, 講談社, 1980
- [10] 直塚玲子『欧米人が沈黙するとき—異文化間のコミュニケーション』大修館書店, 1980
- [11] 西田ひろ子編『異文化間コミュニケーション入門』創元社, 2000
- [12] 古田暁監修, 石井 敏・岡部朗一・久米昭元: 異文化コミュニケーション—新・国際人への条件—改訂版, 有斐閣選書, 1996.
- [13] 石井 敏・久米昭元・遠山 淳・平井一弘・松本 茂・御堂岡潔『異文化コミュニケーション・ハンドブック』, 有斐閣選書 2003. 2
- [14] ル・リトルウッド著 吉永光明・大津敦史・石井和仁訳『コミュニケーション重視の言語教育』, 開隆堂, 1992. 10
- [15] 成毛信男, 『異文化間コミュニケーションへの招待』(共著), 北樹出版, 1998
- [16] 水谷 修, 「21世紀の日本語教育はどのように」, 『ACADEMLA 会誌』全国日本学会, 2004. 12
- [17] 中道真木男, 「映像から文化を読み取る」, 『ACADEMLA 会誌』全国日本学会, 2004. 12
- [18] 小川芳男, 『日本語教育事典』, 大修館書店, 2000
- [19] 田中共子・秦喜美恵, 「日本文化理解のための教材構成の理論と試案—社会的文脈を伴う会話場面を中心に」, 『世界の日本語教育 日本語教育論集 1996 [第6号]』